

2014 年度

相馬子どもオーケストラ & コーラスプロジェクトにおける

週末弦楽器教室に関する報告書



平成 26 年度文化庁 地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ事業



相馬市



目次

はじめに	2
週末弦楽器教室の関係者と東日本大震災	3
エル・システムジャパンとは	3
相馬における活動内容と週末弦楽器教室の概要	4
調査概要	5
2014 年度アンケート調査結果ー保護者ー	6
2014 年度アンケート調査結果の考察ー保護者ー	8
2014 年度アンケート調査結果ー子どもー	9
2014 年度アンケート調査結果の考察ー子どもー	11
2014 年度アンケート調査結果 ー活動に関するアンケートー	13
考察	15
おわりに	17

はじめに

子ども達が教えてくれたこと 2

昨年度、この研究報告書をまとめるときに、「はじめに」の副題に、「子ども達が教えてくれたこと」を掲げた。そして、1年経ち、一般社団法人エル・システムジャパンが福島県相馬市で週末弦楽器教室をはじめて2年が経った。

私たちは2013年度から2年間、実践の調査研究をするという立場で、活動を見守ってきた。週末弦楽器教室は、東日本大震災復興支援の一環として、展開されているという側面を持っている。3月11日が訪れるたびに、私たちは震災の被害やその支援を「忘れない」というキーワードで様々なことを語り継ごうとしている。もちろん、簡単に忘れる訳にはいかない。そして、忘れるだけではなく4年経過した今、様々なものが作り出されていること、それが「忘れないこと」につながっていることも自覚しなければならない。

復興支援は、長い時間をかけて元に戻すだけではなく、新しい形をつくり出していく大きな取り組みになっていこうとしている。この流れの中で、週末弦楽器教室を見ると、その一つの証を見いだすことができる。それは週末弦楽器教室が被災された人たちならでのことではなく、相馬市という地域コミュニティがそもそも持っていた相馬ならでのことを見いだし、そのならでのことが新しい形としての週末弦楽器教室に息づいていることを知るのである。

週末弦楽器教室に通っている子どもたちが、予想もしなかった数多くの演奏会や発表会、その舞台は相馬に留まらず、東京等に広がっている。その度ごとに、子どもたちはわくわくする喜び、その喜びを共に分かち合う友人や、それを支えていくフェローや、エル・システムジャパンの関係者の人たちとのつながり、そのつながりの中に、相馬ならでの強さと丁寧さを感じられる。

本報告書では、学術的な立場で実施する関係上、一つのエピソードから、様々なことに結びつけていくような語りは控えているが、子どもたちが弦楽器を通して学んでいることや得ていること、そして、そこからうまれる可能性については、これからも継続的に調査していきたいと考えている。



週末弦楽器教室の関係者と 東日本大震災

相馬子どもオーケストラプロジェクトの週末弦楽器教室は毎週末行われ、平均して月に4回ほど練習が行われる。この活動は相馬市内にある4ヶ所の施設を活動場所としている。最も頻繁に使用する活動場所は、相馬市総合福祉センター、通称はまなす館（福島県相馬市小泉字高池357）だが、相馬市民会館（相馬市中村字北町51-1）や道の駅そうま（相馬市日下石字金谷77-1）、LVMH子どもアート・メゾン（相馬市中村二丁目2-15）の3ヶ所でも活動が行われている。

相馬市民会館には922席もある大ホールが備えられているため、発表会等のイベントの際に使用することが多い。相馬市民会館は2010年5月から市民会館の改築が検討されていたが、東日本大震災の際に、建屋が損壊し、使用できなくなり、そのまま解体された。その後、震災の影響で建設の先送りを余儀なくされたものの2012年7月に着工、2013年9月に建設工事が完了し現在の施設に至る。新たに建てられた相馬市民会館の記念行事では週末弦楽器教室の子どもたちが演奏を披露した。

LVMH子どもアート・メゾンは2014年7月にオープンした施設で、フランスを本拠地とする世界的高級ブランドグループ、LVMH モエヘネシー・ルイヴィトン・グループから提供された整備資金で、世界的建築家坂茂氏の設計にて建設された。この施設は東日本大震災により被災した子どもたちの心のケアなどの活動拠点として建設され、東日本大震災により生じた子どもたちの心理的ショックを和らげるための心理的なケア活動を行っているNPO法人相馬フォロワーチームの活動拠点として利用されるほか、絵本閲覧室、相談室、研修室、読み聞かせコーナーなどを備え、子どもたちの情操教育や芸術活動を支援している。

週末弦楽器教室に通う子どもたちは、相馬市内にある小学校全10校のうち、市内8つの小学校通学区域から活動に参加している（桜丘、中村第一、中村第二、飯豊、八幡、大野、日立木、玉野）。参加校8つのうち6つの小学校は主な活動場所であるはまなす館から半径5キロ圏内にあるが、玉野小学校は相馬市西部の郊外に位置し、1校だけ離れている。また、全10校のうち、東日本大震災で津波の被害に遭った小学校は2校あり、その中の1校から参加者が来ている。現在、週末弦楽器教室には、指導者を含め数名の参加者が福島第一原子力発電所事故で被害を受けた南相馬市から相馬市へと避難している。



エル・システムジャパンとは

概要

家庭の事情にかかわらず、希望するどんな子どもも楽器の演奏や歌を歌うことを、グループで学んでいけるとのこと。それは芸術を通して自己を表現し、仲間と一緒に創造の喜びを知ることである。そして、一人ひとりの子どもが、誇りと自信を持って生き生きとすることで親が変わり、その周りの人々も変わって、社会が変革されていくこと、こうしたエル・システムの教育理念の実現こそが、東日本大震災によって厳しい状況にさらされ、特に、福島第一原子力発電所事故による影響を心身ともに受けている福島の子どもの尊厳を回復し、夢と希望を与えることができるのではないかという思いから、一般社団法人エル・システムジャパンは2012年3月23日に設立された。

この活動理念に則った活動が福島県相馬市で行われて、3年が経った。活動開始当初、エル・システムジャパンは、相馬市立中村第一小学校楽器部へバイオリン専門家を派遣、及び楽器の購入・修繕等の支援活動を行っていた。その後、市内の他小学校における合唱部、金管バンド、バイオリン教室、鼓笛隊、そして、音楽の授業等、様々な形において活動を展開していった。2013年2月には、エル・システムジャパンの支援が入っている学校の子ども達157名が一同に会する「ジョイントコンサート」が、多くの支援者の暖かい応援のもと初めて相馬市にて実施された。同年4月からは、中学生になった弦楽器経験者も継続して練習ができるようにと「週末弦楽器教室」が30名でスタートした。同年8月からは希望するすべての子どもが参加できるように市内全域に活動を広げ、現在では、未就学児や高校生を含む88名（2015年1月現在）の子どもたちが、週末弦楽器教室のメンバーとして日々練習に励んでいる。

コーラスにおいても、市立桜丘小学校合唱部をベースに中学生の合唱部OB・OGが加わった形での活動がはじまり、同年12月には震災後再建された新市民会館にて、135名の「相馬子どもオーケストラ & コーラス」のデビュー公演を行なった。

さらに、活動の幅を広げているエル・システムジャパンは、2014年6月より岩手県上閉伊郡大槌町でも音楽教育活動を始めた。大槌町では既存の学校クラブ活動への指導者の派遣と希望者による週末弦楽器教室が行われている。ここで指導にあたる指導者はエル・システムジャパン立ち上げ初期よりインターンとして活動に関わり、相馬市の週末弦楽器教室のフェローとして活動に参加していた。大槌町での活動は始まったばかりだが、2014年12月にクリスマスコンサートを開催し、2015年1月には大槌町の子どもたちが相馬へ訪問し、相馬の週末弦楽器教室と交流を深めた。

相馬における活動内容と 週末弦楽器教室の概要

設立経緯

南米ベネズエラ発祥のエル・システム (El Sistema) は、英語のまさに The System と同様のスペイン語で、音楽教育システムを示す言葉である。この活動は無償で子どもたちに音楽の基礎知識や楽器の演奏技術を教え、オーケストラの合奏や合唱に参加する機会を与える音楽・オーケストラ教室である。ベネズエラ国内におけるこの活動の運営はシモン・ボリバル音楽財団によって行われている。エル・システムはオーケストラやコーラスの参加を通じて、子どもたちに集団行動を学ばせ、体系化した音楽教育を行うことを使命とし、音楽を通して集団としての協調性や社会性を育みコミュニティとの関わりを作ることを目的としている。

エル・システムは子どもたちに最大限の可能性を發揮させ、成長に重要な価値観を身につける手助けをしている。この活動を通して世界の第一線で活躍する優秀なアーティストを輩出している。現在では、活動の使命や目的に世界が共感し、イギリスやアメリカ合衆国、日本を含め、50 カ国以上の国・地域に導入され、影響を与えている。『エル・システム ベネズエラの音楽の奇跡』、『エル・システムジャパンホームページ』参照

日本では東日本大震災によって厳しい状況にさらされた福島の子もたちが芸術を通して自己表現や仲間と一緒に創造の喜びを知り、尊厳を回復することで、夢と希望を与えることができるのではないかという思いから、福島県相馬市で活動が始まった。被災地の復興に向けた年月は、まさに今の子どもたちが大人になる人生の過程そのものである。エル・システムジャパンは、地元の人々の郷土愛に基づくアイデンティティを大切に、地元へ根付いた持続可能な仕組みを築くために相馬の子もたちに寄り添うことを再優先に考えている。



相馬子どもオーケストラ&コーラスプロジェクトでは、①小学校の器楽部の弦楽器指導、②コーラスの指導、③週末弦楽器教室の3つが主要な活動となっている。

①小学校の器楽部の弦楽器指導は相馬市内にある2つの小学校において支援を行なっている。具体的には、弦楽器の専門家による技術指導や楽器購入・修繕の支援である。特に専門家による技術指導は、新入部員へ楽器の構え方などの基礎を一から教えるだけでなく、コンクールに向けて曲を作り上げる際に、器楽部の子もたちや顧問の先生が作っていきたいイメージに沿うような弾き方などの指導もしている。

②コーラスの指導は小学校の合唱部に専門家を派遣し、専門家がアドバイザーとして合唱の指導を行なっている。今までは1つの小学校でのみ活動が行われていたが、現在では週末弦楽器教室のように週末合唱教室も展開され、相馬市内の小中学校の児童・生徒が参加できる環境を作っている。

③週末弦楽器教室は、おもに毎週日曜日の10時~16時30分に開催され、月に4回程度活動が行われている。練習時間は午前中が初心者(ひつじさんチーム・バッハチーム)、午後が経験者(モーツァルトチーム)となっている。初心者のなかでも、意欲がある子どもは午後の練習にも参加していることがある。2014年11月から土曜日に習熟度別グループプレッスンが開始された。この練習は東京在住の音楽監督(オーケストラ)が相馬に指導に来る週末に行われる。10時から1時間毎に9つの習熟度・楽器別クラスでグループプレッスンを行う。9つの習熟度・楽器別クラスはバイオリン6段階、ビオラ1段階、チェロ2段階で構成されている。密な練習時間を過ごすことができる習熟度別グループプレッスンは子どもたちのスキル向上に一役買っている。現在、週末弦楽器教室には未就学児から高校生までの88名の子もが在籍している。男子18名、女子70名(1:4)と圧倒的に女子が多い。また、ここに在籍する子どもの多くは小学生で、67名(76.1%)と最も多く、高校生が2名(2.2%)と最も少ない。

日本でもベネズエラ同様、弦楽器教室は無償で行われ、活動資金は、個人・団体・企業からの寄付、及び、文部科学省からの補助金で運営されている。また、2014年4月より、文化庁事業の一環として相馬市が本事業を予算化。一部活動(フェローの交通費等)は国・市補助金により実施されている。

週末弦楽器教室は代表である菊川稷氏をはじめ、音楽監督(オーケストラ)1名、技術指導者1名、技術指導補助を行うフェロー19名(うち1名は2014年6月よりエル・システムジャパンの職員)、現地ボランティアスタッフ3名、現地運営スタッフ3名(現地コーディネーター2名、楽器修理業務担当1名)、の計28名で構成され、彼らによって運営が行われている(2015年1月現在)。また、当日の運営(受付・会場準備など)や発表会当日の会場作りには保護者も積極的に活動に参加している。

調査概要

本調査は「週末弦楽器教室」として実施されている「音楽を活用した創造的な体験活動」について児童・生徒が地域社会で活躍するためにコミュニティ形成の多様な経験が必要であるという視点から、体験活動の状況・効果の把握を行うとともに、「音楽を活用した創造的な体験活動」の可能性についての調査・分析・評価等を行った。

昨年度は参加する児童・生徒、参加させている保護者、指導者・支援者、相馬子どもオーケストラプロジェクト関係者の4つのカテゴリを対象に調査を行った。今年度は昨年度に得られたデータの中から特筆すべきカテゴリから項目を抽出し、比較・分析を行うことを目的としているため、参加児童・生徒とその保護者を主な対象とした。

調査手法は昨年度に引き続き、質問紙法を使用した。子どもには、実態調査「音楽を活用した創造的な体験活動に関する調査～児童・生徒向けアンケート～」として、小学校4年生以上の参加児童・生徒を対象に、9項目のアンケート調査を行った。児童・生徒向けのアンケートを小学校4年生以上としたのはアンケートを作成する際に使用した「第2回子ども生活実態基本調査報告書 [2009年] (ベネッセ総合研究所)」が対象者を小学校4年生から高校2年生としていたためである。以下のページで、結果を全国調査と比較し、分析を行なった。今年度の「音楽を活用した創造的な体験活動に関する調査～児童・生徒向けアンケート～」の対象者は58名であった。質問紙を配布し、24部を回収した。回収率は41.4%となった。

また、参加者には「活動に関するアンケート」調査を行っており、7月6日から12月23日まで計21回、毎回8項目のアンケートを配布し、活動終了後に回収をした。

保護者には、実態調査「音楽を活用した創造的な体験活動に関する調査～保護者向けアンケート～」として、活動に参加している子どものすべての保護者を対象に9項目の質問紙を行った。得られたデータは参加者と同様に、全国調査と比較、分析を行なった。今年度の「音楽を活用した創造的な体験活動に関する調査～保護者向けアンケート～」の対象は67世帯である。対象を世帯としているのは、週末弦楽器教室には兄弟姉妹で通っている場合が多々ある。データの重複を防ぐため、1世帯につき1部の質問紙を配布し、回答を得た。同じ世帯で複数人活動に参加している場合は、一番活動に参加している子どもについて質問紙に答えてもらうよう事前に注意をした。各家庭に質問紙を配布し、33部を回収した。回収率は49.3%だった。

昨年度と比べ、子どもも保護者も質問紙の回収率がそれぞれ59.0%から41.4%、65.7%から49.3%と低下した。回収率が低下した要因としては、回収予定日が選挙のため、練習がなくなったことがあげられ、それをフォローする時間がなかった。次年度はスケジュールを考慮の上、回収率が向上するよう努めていきたい。



2014 年度アンケート調査結果

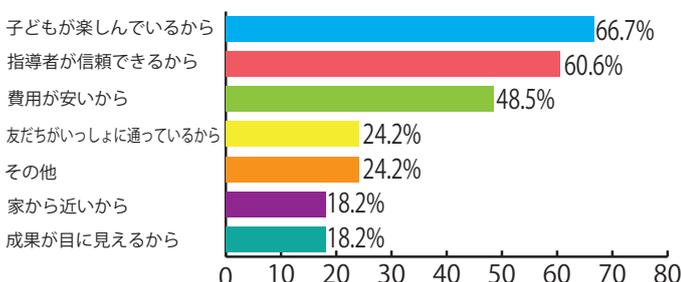
一保護者一

昨年度に引き続き、プログラムに子どもを参加させている保護者がどのような気持ちでプログラムを見守っていたかを知ること、そして、保護者と子どもとのコミュニケーションについて知ることがこのアンケートのねらいである。また、保護者が本プログラムに期待することや活動を選んだ理由について考察を行う。

ここでは、音楽や芸術に対する意識に対して同様の主旨でとられた全国調査との比較を行う。このプログラムとの比較を行うための全国調査は、ベネッセ教育総合研究所が行なった「第2回学校外教育活動に関する調査 2013」と「第2回子ども生活実態基本調査報告書 [2009年]」と栃木県総合教育センターが行なった「子どもたちのコミュニケーションに関するアンケート調査～集団における望ましい人間関係づくりに関する調査研究～(平成19年度調査研究事業)」をもとにした。これらのアンケートで使用されている項目を参考に、9項目のアンケートを作成した。

はじめに、保護者と週末弦楽器教室の関係について述べる。保護者が「週末弦楽器教室を選んだ理由」として最も多いものは「子どもが楽しんでいるから」の66.7%であった。次いで「指導者が信頼できるから」が60.6%、「費用が安いから」が48.5%となった。

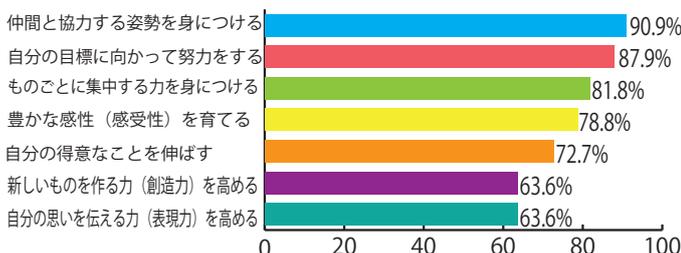
週末弦楽器教室の活動を選んだ理由（上位7項目）



保護者が「週末弦楽器教室を通して子どもに期待すること」として、「とても期待している」と回答した上位7項目でみていく。ここでは、90.9%もの保護者が「仲間と協力する姿勢を身につける」ことを期待している。全国(2013年)の「音楽・芸術活動を通して子どもに期待すること」では、「豊かな感性(感受性)を育てる」が51.1%と最も高いが、週末弦楽器教室では4位となっている。

次いで、「自分の目標に向かって努力をする」が87.9%、「ものごとに集中する力を身につける」が81.8%となった。

保護者が週末弦楽器教室を通して子どもに期待すること（上位7項目）



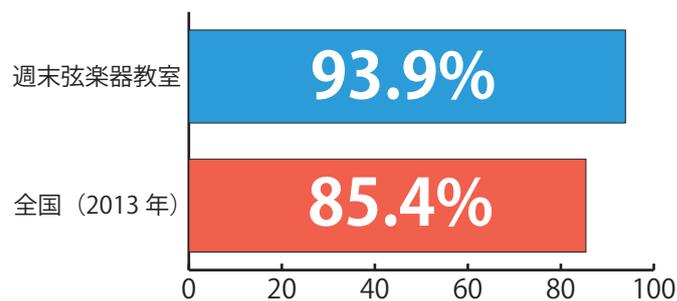
次に、子どもの音楽活動や学習状況について全国と比較する。この1年間での子どもの音楽活動は全国同様、週末弦楽器教室でも楽器の練習・レッスンが最も多く、66.7%となり、1位を占めた。楽器の練習・レッスンには、ピアノや弦楽器、トランペット等多様な楽器を含むが、特に楽器の練習・レッスンを行なっている66.7%の子どものうち、半数の子どもが週末弦楽器教室以外でも弦楽器に触れるという結果となった。次いで、「何もしていない」が24.2%、「合唱/コーラス」が12.1%である。

この1年間でお子様定期的にしていた音楽活動や芸術活動はありますか？（週末弦楽器教室を除く）

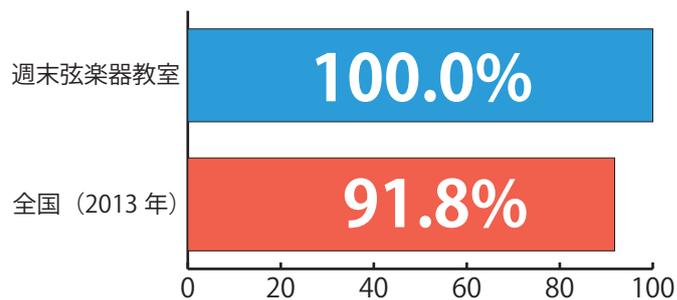
	週末弦楽器教室		全国(2013年)	
楽器の練習・レッスン	1位	66.7%	1位	18.8%
絵画/造形	7位	0.0%	2位	3.5%
音遊び/リズム遊び(音楽教室)	7位	0.0%	3位	2.8%
バレエ	7位	0.0%	4位	2.1%
リトミック	7位	0.0%	5位	1.9%
合唱/コーラス	3位	12.1%	6位	1.8%
茶道	7位	0.0%	7位	1.1%
演劇/ミュージカル	4位	3.0%	8位	0.7%
写真	7位	0.0%	9位	0.6%
華道/フラワーアレンジメント	7位	0.0%	10位	0.5%

昨年同様、「子どもにとって音楽や芸術の活動は必要だ」「子どもが音楽や芸術に触れる機会を増やしたい」は全国(2013年)より多く、それぞれ93.9%、100.0%という結果になった。

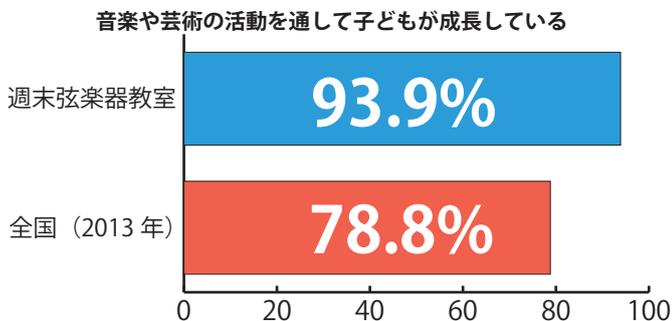
子どもにとって音楽や芸術の活動は必要だ



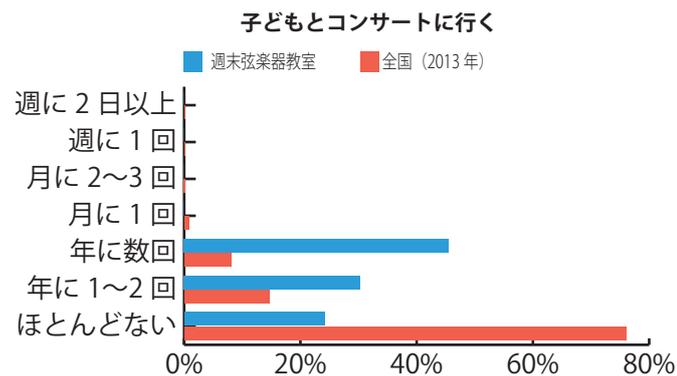
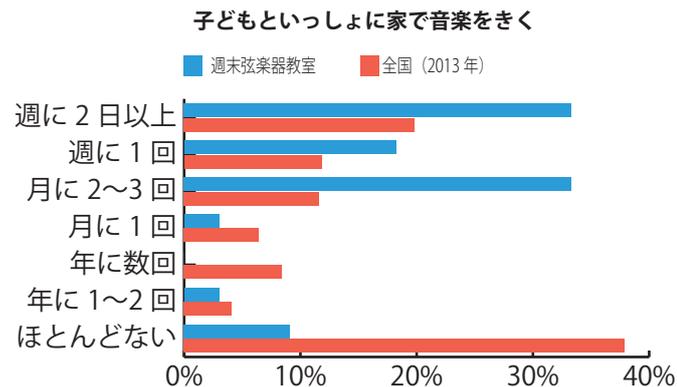
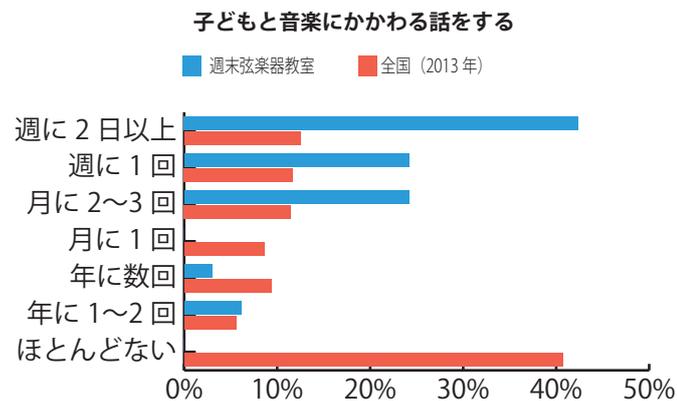
子どもが音楽や芸術に触れる機会を増やしたい



また「音楽や芸術の活動を通して子どもが成長している」と感じている保護者は93.9%いた。



保護者が子どもと音楽にどのくらいの頻度関わっているのかを調査したところ、「子どもと音楽にかかわる話をする」「子どもといっしょに家で音楽をきく」では週に2日以上が最も多い。一方、全国調査同様、「子どもとコンサートに行く」機会はあまり多くないことがわかる。



子どもたちの学習状況では、子どもが家庭での学習に使用する教材としては、全国調査同様に週末弦楽器教室に通う子どもは「通信教育 (定期的に郵送で届く教材)」「市販の参考書・問題集」が最も多い結果となった。この結果は住んでいる地域に関係なく、教材を取得しやすいということが考えられる。

この1年間でお子様が家庭でしている学習方法や使っている教材はありますか? (複数回答)

	週末弦楽器教室		全国 (2013年)	
通信教育	1位	42.4%	1位	34.7%
市販の参考書・問題集	2位	33.3%	2位	21.5%
絵本	6位	12.1%	3位	17.8%
知育玩具	12位	0.0%	4位	10.6%
塾の参考書・問題集	3位	18.2%	5位	10.2%
幼児向け雑誌	12位	0.0%	6位	9.0%
パソコンを用いて学習する教材	8位	9.1%	7位	4.2%
学習雑誌	6位	12.1%	8位	3.4%
知育・教育アプリ	12位	0.0%	9位	3.4%
携帯ゲーム機用の学習ソフト	9位	3.0%	10位	3.0%



2014 年度アンケート調査結果の考察

一保護者一

保護者と週末弦楽器教室の関係

保護者が「週末弦楽器教室を選んだ理由」として最も多かった「子どもが楽しんでいるから」を選択する要因として考えられることをいくつかあげる。マンツーマンの指導が多い弦楽器指導において、週末弦楽器教室では、複数人に指導を行うグループレッスンが行われていることや、友だちと一緒に通っている（4位）ことがあげられる。昨年度の調査に比べ、練習のなかで子どもたち同士が会話をする場面や、一緒に活動する機会が増えた。そのような活動によって子どもたちは活動を楽しんでいることが推察される。

この活動を選んだ理由の2位である「指導者が信頼できるから」では、地域密着型の専門家に加え、普段は習うことができない専門家に技術を習うことができることが考えられる。さらに、指導補助として活躍する現地のスタッフやフェローなどのスタッフの役割も大きいと考えられる。グループレッスンとはいえ、彼らのような補助スタッフがいることで細かい指導を受けることができる。

「週末弦楽器教室を通して子どもに期待すること」では、保護者は「仲間と協力する姿勢を身につける」ことを最も期待している。これはエル・システムがかかげる目的の1つである「音楽を通して集団としての協調性や社会性を育みコミュニティとの関わりを作ることを目的とする」ことに共通する。保護者がこの活動の理念に賛同し、子どもたちに活動への参加を促していることが考えられる。

全国（2013年）では、保護者は子どもたちに音楽や芸術活動を通して「豊かな感性（感受性）を育てる」ことを最も期待している。これに対して、週末弦楽器教室の保護者は、「仲間と協力する姿勢を身につける」「自分の目標に向かって努力をする」「ものごとに集中する力を身につける」が上位3位に入っている。週末弦楽器教室の保護者は、週末弦楽器教室の活動を通して、子どもたちが集団のなかや普段の生活で活かせる能力を身につけてもらいたいと考えていることがわかる。

保護者と子どもにとっての音楽活動

音楽活動について全国と比較する。この1年間での子どもの音楽活動は全国同様、週末弦楽器教室でも楽器の練習・レッスンが最も多く、66.7%となり、1位を占めた。この66.7%の子どものうち、半数の子どもが週末弦楽器教室以外でも弦楽器に触れるという結果となった。週末弦楽器教室以外で楽器に触れる子どもは、小学校の器楽部に所属している、または、弦楽器の個人レッスンに通っていることがあげられる。そのため、子どもたちの半数は、週末弦楽器教室以外でも弦楽器に触れる機会がある。

さらに、3位となった「合唱／コーラス」は、エル・システムジャパンでも週末コーラス教室を開催しているということもあるが、もともと相馬市では合唱やコーラスが盛んに行われているという地域性もある。エル・システムジャパンが週末コーラス教室の活動をはじめの前から、小学校には合唱

部があったことからわかる。その結果、全国よりも6倍以上の子どもが「合唱／コーラス」の活動をしていると考えられる。

このような音楽活動から、週末弦楽器教室に通う子どもとその保護者がもともと音楽活動に熱心に取り組んでいることが言える。これは「子どもにとって音楽や芸術の活動は必要だ」（93.9%）や「子どもが音楽や芸術に触れる機会を増やしたい」（100.0%）という保護者の回答からもわかる。特に、「子どもが音楽に触れる機会を増やしたい」という回答では保護者の音楽活動への熱意が感じられる。週末弦楽器教室に通う子どもは、少なくとも週に1回は週末弦楽器教室に通っており、器楽部や週末コーラス教室に通っている子どももいるため、多いと週に3回以上音楽活動を行なっている。

他にも、エル・システムジャパンが行う活動のなかで、週末弦楽器教室では、世界各国の有名な指揮者や演奏家がたびたび相馬市に訪問し、子どもと一緒に活動することや、相馬市内の小学校に演奏家を派遣し、さまざまな形で音楽に触れる機会を提供している。他地域ではなかなかできない経験や体験を多くできる環境にいるものの、現状には満足せずに、より多くの音楽活動の機会を増やしたいと考える保護者が多いことがわかる。

「音楽や芸術の活動を通して子どもが成長している」と感じている保護者が93.9%いたことは、週末弦楽器教室で演奏を披露する機会が多いことが1つ要因としてあげられる。週末弦楽器教室では発表会はおもに3つのスタイルがある。①仙台や東京などの相馬市以外での演奏会への参加、②活動の成果を保護者に見せることや地域の方に向けた相馬市内で行う演奏会、③ゲストとして来た音楽家と一日の活動を総括するために行われる発表会がある。①～③を合わせると月に1回以上のペースで発表する機会を子どもたちは与えられている。そのため、保護者が子どもの成長を発表会を通して感じることができると推察される。

週末弦楽器教室の親子は子どもと音楽に関わる会話が多くのことや、一緒に音楽を聞く機会が多い。単に、音楽活動の回数が多いため、音楽に関わる会話が多くなると考えられるが、そのような状況を後押しすることは車での送迎が1つあげられる。週末弦楽器教室では車での送迎なしには活動に参加できない状況があるが、帰りの車でその日の活動について会話をすることが習慣になっている親子もいる。さらに活動には保護者の協力なしには成り立たない部分もあり、積極的に保護者が週末弦楽器教室と関わっていくことで、さらに会話が広がることが考えられる。

全国調査同様、首都圏に比べ、地方都市ではコンサートが開催される機会が少なく、芸術活動に触れる機会はさほど多くない。それを考慮すると、週末弦楽器教室に通う子どもは年に数回は保護者と足を運んでいる。それも、この活動での保護者の様子からもわかるように、とりわけ音楽活動に熱心な姿勢が伺える。

週末弦楽器教室に通う親子にとって、音楽が1つのコミュニケーションツールとなっていることがわかる。

2014 年度アンケート調査結果

一子ども

昨年度に引き続き、プログラムに参加している子どもがこの活動を通して親や仲間を含む他者とのようなコミュニケーションをとっていたのか、その特徴に着目した。

保護者と同様に、全国調査との比較を行うために、①ベネッセ教育総合研究所が行なった「第2回子ども生活実態基本調査 [2009年]」②国立教育政策研究所が行なった「平成25年度全国学力・学習状況調査」③栃木県総合教育センターが行なった「子どもたちのコミュニケーションに関するアンケート調査～集団における望ましい人間関係づくりに関する調査研究～(平成19年度調査研究事業)」を参考にした。これらのアンケートで使用されている項目を参考に、9項目のアンケートを作成した。

週末弦楽器教室に通う子どもたちは「日ごろよく話をしたりいっしょに遊んだりする友だち」が1人から21人以上、幅広くおり、4.2%の子どもはいないと回答するものの、ほとんどの子どもは友だちがいる環境にある。それは全国調査と比較したときにも同じことが言え、1.4%の子どもがいないと回答するが、95%以上の子どもは友だちがいることがわかる。

日ごろよく話をしたりいっしょに遊んだりする友だち

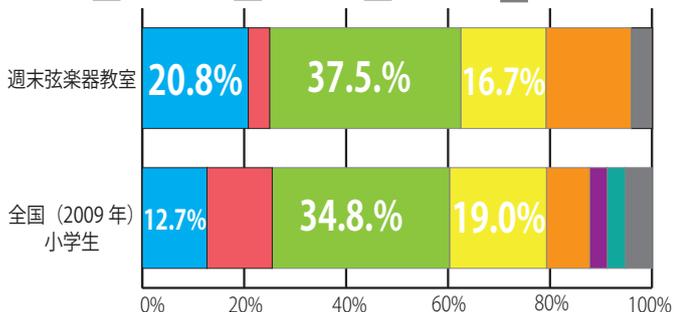
- いない
- 1人
- 2~3人
- 4~6人
- 7~10人
- 11~20人
- 21人以上
- 無回答



一方で、「悩みごとを相談できる友だち」がどのくらいいるのかという問いでは、全国調査でも週末弦楽器教室でもいないと回答する子どもが増える。今回のアンケートに回答していた大半が小学生であるが、もとの全国調査では、結果を年齢別に見ると、いないという回答は小学生・中学生・高校生と年齢があがるにつれ、減少傾向にある。週末弦楽器教室において子どもたちが成長する過程で変化していくことが考えられるため、今後の子どもたちの動向を見守る必要がある。

悩みごとを相談できる友だち

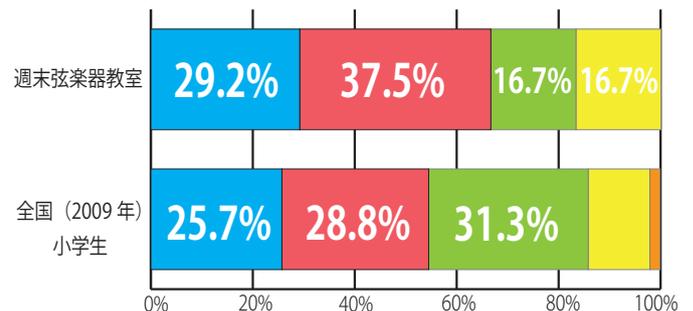
- いない
- 1人
- 2~3人
- 4~6人
- 7~10人
- 11~20人
- 21人以上
- 無回答



週末弦楽器教室に通う子どもたちは「年齢や性別の違う人と話をすることが楽しい」という設問において、「とてもそう」「まあそう」を合わせると、66.7%がポジティブな回答を示した。全国調査でもポジティブな回答は54.5%である。

年齢や性別の違う人と話をすることが楽しい

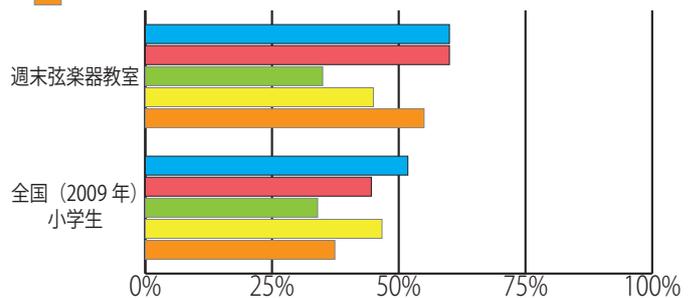
- とてもそう
- まあそう
- あまりそうではない
- ぜんぜんそうではない
- 無回答



次に子どもたちと親の関係を見ていく。昨年度の調査で週末弦楽器教室に通う子どもは全国調査に比べ、親とよく会話していることがわかった。昨年度と同様に、全国調査も週末弦楽器教室も父親との会話よりも母親との会話のほうが多いという特徴は変わっていない。

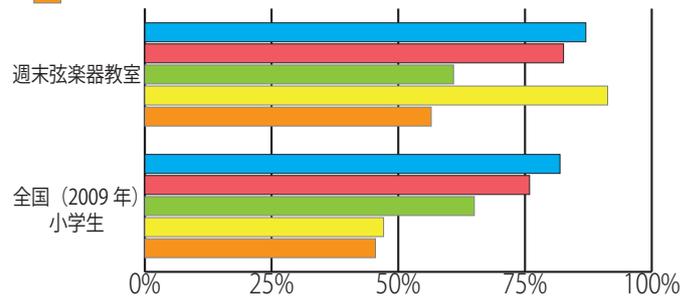
父親との会話の比較グラフ

- 学校のできごとについて
- 勉強や成績のことについて
- 将来や進路のことについて
- 友だちとのことについて
- 社会のできごとやニュースについて



母親との会話の比較グラフ

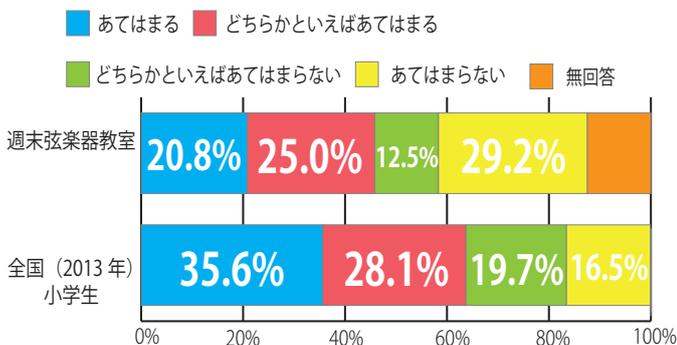
- 学校のできごとについて
- 勉強や成績のことについて
- 将来や進路のことについて
- 友だちとのことについて
- 社会のできごとやニュースについて



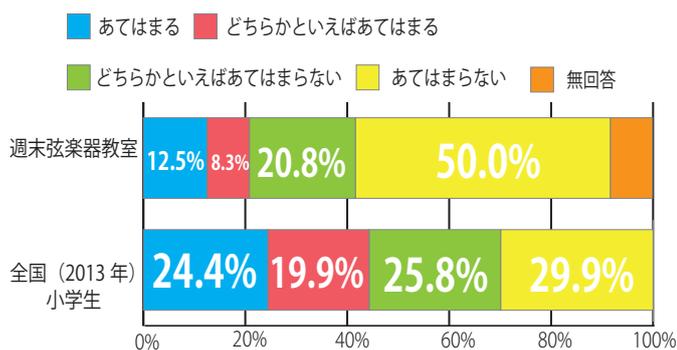
全国調査と比べ、週末弦楽器教室の子どもは父親とは「学校のできごと」「勉強や成績のこと」「社会のできごとやニュースについて」よく話をしていることがわかる。母親とは「友だちのことについて」よく話していることがわかる。とくに、全国調査に比べ、母親に「友だちとのことについて」話す子どもが多く、91.3%という結果となった。

次に、子どもたちと地域の関係性についてのデータを示す。週末弦楽器教室に通う子どもたちのなかで 83.3%が自分が住んでいる地域に満足していると回答した。全国同様、住んでいる地域の満足度が高い。子どもたちの 45.8% が地域の行事に参加する。「地域の大人に勉強やスポーツを教えてもらうことや一緒に遊ぶ」「地域の大人から褒められたことがある」者は、全国調査に比べ「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」との回答がそれぞれ 23.5%、12.5%低い結果となった。これらの結果について後ほど考察をする。

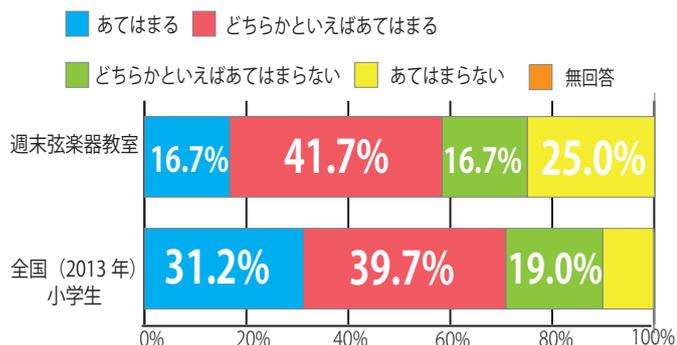
いま住んでいる地域の行事に参加している



地域の大人に勉強やスポーツを教えてもらったり、一緒に遊んだりすることがある

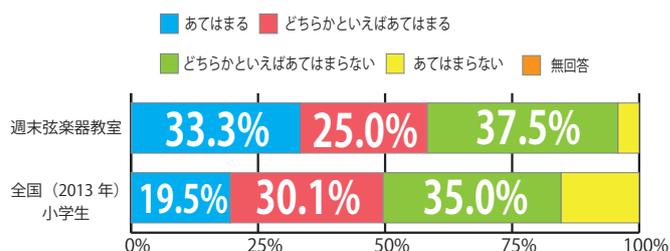


地域の大人から褒められたことがある

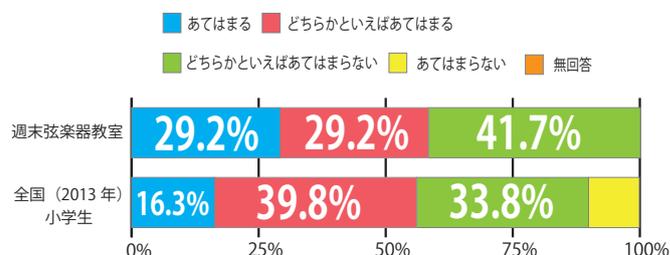


最後に、子どものコミュニケーション能力を見ていく。週末弦楽器教室に通う子どもたちは「友だちの前で自分の考えや意見を発表することが得意」や「自分の行動に自信を持っている」という設問で、全国調査に比べ、13%ほど高いという結果になった。

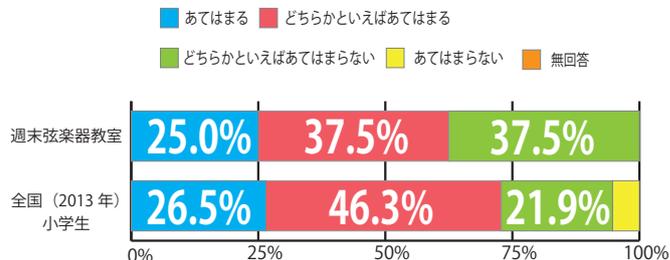
友だちの前で自分の考えや意見を発表することが得意



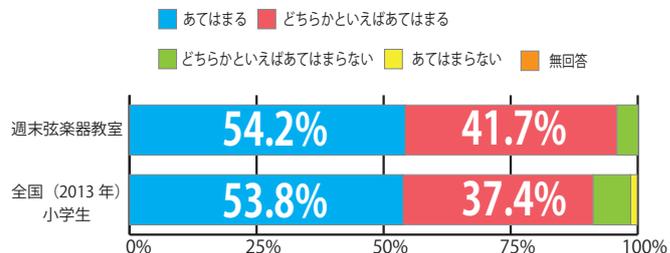
自分の行動や発言に自信を持っている



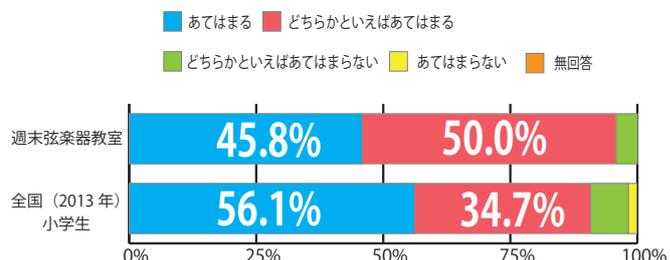
友だちに伝えたいことをうまく伝えることができる



友だちと話し合うとき、友だちの話や意見を最後まで聞くことができる



一人ひとりの人間には考えや性格などに違いがあるということを大切にしている



2014 年度アンケート調査結果の考察

一子ども一

子どもと友だちとの関係

9 ページでも述べているように週末弦楽器教室に通う子どもたちは「日ごろよく話をしたりいっしょに遊んだりする友だち」が 1 人から 21 人以上と、幅広くおり、4.2% の子どもはいないと回答するものの、ほとんどの子どもは友だちがいる環境にある。それは全国調査と比較したときにも同じことが言える。全国調査では「日ごろよく話をしたりいっしょに遊んだりする友だち」が 1.4% の子どもがいないと回答するものの、95% 以上の子どもは友だちがいることがわかる。

「悩みごとを相談できる友だち」について聞くと、「日ごろよく話をしたりいっしょに遊んだりする友だち」がいるかどうかという問いに比べ、友だちの人数が減少する傾向がある。特に、「いない」と回答する子どもが、全国調査が 12.7% に比べ、週末弦楽器教室では 20.8% と多い。

しかし、全国調査の結果を年齢別（学校別）に見ると、「いない」という回答は小学生・中学生・高校生と年齢があがるにつれ、減少傾向にある。現在、週末弦楽器教室に通う子どもの 76.1% が小学生であり、アンケートの大半の回答を小学生（小学校 4～6 年生）がしているため、今後、変化していく可能性が高い。

このように、子どもたちにとって、他愛のない話や遊ぶ友だちは多くいても、悩みごとを相談をする友だちが減少することを考慮すると、相談をするという行為は子どもにとって、1 歩踏み込んだ行為であると考えられる。

週末弦楽器教室の特徴の 1 つとして、未就学児から高校生までの幅広い年代の子どもが一齐に弦楽器の練習をしていることがあげられる。初心者クラスには未就学児から高校 1 年生が所属し、経験者クラスには小学校 4 年生から高校 2 年生が所属している。学校生活のなかで、子どもたちの異学年交流は学校内では縦割り活動等で、定期的かつ継続的に行われるものの、学校を超えた環境ではなかなか行われない。

しかし、週末弦楽器教室に通う子どもたちは毎週末、このような機会が与えられている。そのため、学年や年齢が違う人とも交流する機会が多く、学年や年齢を超えて会話をする場面や、休憩中に楽しく遊んでいる様子が見られる。

参加している子どもの多くが小学生であり、彼らを含む子どもたちの会話のなかでは敬語を使用する場面があまり見られない。小学校の異学年同士でも、小学生と中学生の会話でも特に、敬語を使用している場面がほとんどない。そのことが「年齢や性別の違う人と話をすることが楽しい」の結果にもあらわれていると考えられる。

一方、年齢や性別の異なる人と触れる機会に苦手意識のある「あまりそうではない」「ぜんぜんそうではない」と回答した者が週末弦楽器教室では 33.4% であるが、全国調査では 43.4% と 4 割を超える。週末弦楽器教室では学年や性別に関係なく気軽に相手に話せる雰囲気作りが自然とされており、苦手意識のある子どもが少ないと考えられる。

子どもと保護者との関係

週末弦楽器教室に通う子どもは、保護者とよく会話をしていることがわかった。昨年度と同様に、全国調査も週末弦楽器教室も父親との会話よりも母親との会話の方が多いという特徴は変わっていない。

全国調査と比べ、週末弦楽器教室の子どもは父親とは「学校のできごと」「勉強や成績のこと」「社会のできごとやニュースについて」よく話をしており、母親とは「友だちのことについて」よく話している。特に、母親に「友だちのことについて」話す子どもが全国調査に比べると、44.2% も多く 91.3% という結果となった。とくに母親との会話において「学校のできごと」と「友だちのこと」について話すという数値が近いことにも着目ができる。友だちと日常的に会う学校のできごとのなかで、友だちの話が出てくることが多くあるのではないだろうか。そのため、2 つの項目の値が類似していると考えられる。

父親・母親ともにそれぞれと会話する際によく出てくる話題「学校のできごと」は、日ごろの夕食の場で話していることが考えられる。別の設問にて、「家の人と普段（月曜日～金曜日）、夕食を一緒に食べるか」という質問に対して、「とてもあてはまる」「まあまああてはまる」と回答した子どもは 79.2% と 8 割近くであった。日常的にその日のできごとについて家族で会話をしている可能性が高い。そのため、父親とも夕食の際に、学校のできごとについて話していることが考えられる。

「家の人は授業参観や運動会などの学校の行事に来る」という設問では、「とてもあてはまる」「まあまああてはまる」と回答した子どもは 100.0% であった。週末弦楽器教室の普段の活動はもちろん、発表会においても、子どもたちの活動の様子を見学している保護者は多い。ここに参加している子どもの保護者は子どもの活動に積極的に関わっていることがわかる。

保護者のアンケート結果の考察でも触れたが、子どもたちは週末弦楽器教室に通うときに、保護者に車で送迎してもらう。その車内でも、その日の活動の様子について親と会話があることが想定できる。

上記の 2 点において、週末弦楽器教室では見学をしている保護者も送迎に来る保護者も大半が母親であることが多い。このように母親と接触する機会が多いことが、父親との会話よりも母親との会話の方が多いことにも繋がっていると推察される。

週末弦楽器教室の子どもたちは、現在の家族との関係に 66.7% が満足しているという回答を得た。日ごろの会話などのコミュニケーションから家族との関係も良好に保たれていることがわかる。

このように、子どもと保護者が同じ時間を共有することが多く、良好な関係が築かれていることが、自然と子どもたちとの会話が増えること、そして、さまざまな会話につながっていると考えられる。

子どもと地域との関係

子どもたちと地域の大人との関係を見ていく。週末弦楽器教室は地域密着型のプログラムとして、現地在住の指導者やコーディネーターが活動の中心となっており、この活動には現地在住のボランティアスタッフも関わっている。そのため、子どもたちはこの活動を通して、地域の大人との交流を持つことができる。普段から地域の大人と交流がある週末弦楽器教室に参加する子どもが地域とどのように関わっているのか検討する。

週末弦楽器教室に通う子どもたちのなかで 83.3%が自分が住んでいる地域に満足していると回答しているもの子どもたちは自分の地域との接触が少ないということが分かる。

子どもたちの 45.8% が地域の行事に参加するが、全国と比べて約 18%少ない。相馬市で行われるイベントのなかには、県外からも多くの観光客が来る一大イベント、相馬野馬追がある。今年度の相馬野馬追が行われる日はもともと週末弦楽器教室の練習日となっていたが、練習が休みになった。相馬野馬追では、週末弦楽器教室に通う子どもやその保護者が野馬追をする側として参加する者もあり、この地域では根付いた行事となっている。

他にも、子どもたちは相馬市が主催で行なった敬老会や LVMH 子どもアート・メゾンのオープンイベントで演奏を披露する機会も多くある。このように地域密着型のプロジェクトとして活動を行なっているものの、地域の行事への参加率が低いという結果になった。

全国に比べ、地域の大人に勉強やスポーツを教えてもらうことや一緒に遊ぶことも 20%ほど低い結果となった。このような要因として考えられることは、気軽に地域の人が集まる公共施設などがあまりなく、学校や塾、習い事の先生以外に接する場所が少ないことがあげられる。また、週末弦楽器教室として地域の行事に参加している場合、地域の行事に参加しているという意識よりも、週末弦楽器教室の発表の一環だという意識があることが考えられる。

そのため、週末弦楽器教室での現地スタッフや敬老会などの発表の場は地域の大人と関わるることができる貴重な場となっている。

このように、日常的に子どもが地域の大人と接する機会が少ないことがわかる。これはなるべく外で遊ばないことを推奨されていることや車で移動することが日常的であるという地域性も考えられる。このような状況だが、地域の大人から褒められたことがある子どもは 58.4% と 6 割近くおり、全国調査より低いものの、週末弦楽器教室の活動を通して、地域の大人と接する機会が増えたことも、地域の大人に褒められる機会に繋がっていると考えられる。

子どものコミュニケーション能力

最後に、子どものコミュニケーション能力を見ていく。これは、「平成 25 年度全国学力・学習状況調査」の際に、平成 25 年度より新たに調査内容に加えられた。コミュニケーション能力は、コミュニケーション教育推進会議のなかで、国際社会を生き抜く異文化コミュニケーション能力、社会に出てから最初に直面する世代間コミュニケーションの問題を克服する能力、人間関係を形成していく能力と言われ、これからの時代を生きる子どもたちにとって基礎的な能力の1つとされる。コミュニケーション能力において子どもたちの現状や課題のなかで、子どもたちは限られた集団でのみコミュニケーションをとる傾向があることや、コミュニケーションをとっているつもりが、実際は、一方的に自分の思いを伝えているにすぎない場合が多いという指摘がされている。このような課題を抱える子どもたちがコミュニケーション能力を育むためには①自分とは異なる他者を認識し、理解すること、②他者認識を通して自己の存在を見つめ、思考すること、③集団を形成し、他者との協調、協働が図られる活動を行うこと、④対話やディスカッション、身体表現等を活動に取り入れつつ正解のない課題に取り組むことが必要だと言われている。

週末弦楽器教室に通う子どもたちは「友だちの前で自分の考えや意見を発表することが得意」「自分の行動に自信を持っている」という設問で、全国に比べ、13%ほど高いという結果になった。普段の活動のなかでも、経験者が初心者に弦楽器の弾き方を教えている場面や、パートごとに練習する際に、中学生やよりできる子どもがリーダーシップを発揮し、練習をしている様子が毎回の活動のなかで見られた。このように日常的に人の前に立って何かをすることに慣れているため、結果として数字が高くなったと考えられる。

弦楽器の練習の際に、「わからない・できない人」に対しても、子どもたちが寄り添って一緒に練習する姿が多く見られた。できない人に合わせて一緒に弾いてあげることや根気強く同じところを繰り返して練習するなど、一緒に練習してうまくなろうという姿勢が見えた。

これらの行動からも子どもたちのなかに「一人ひとりの人間には考えや性格の違いがあるということ大切にしている」ことが根付いており、それぞれに合わせた行動をしていると考えられる。



2014 年度アンケート調査結果

一活動に関するアンケート

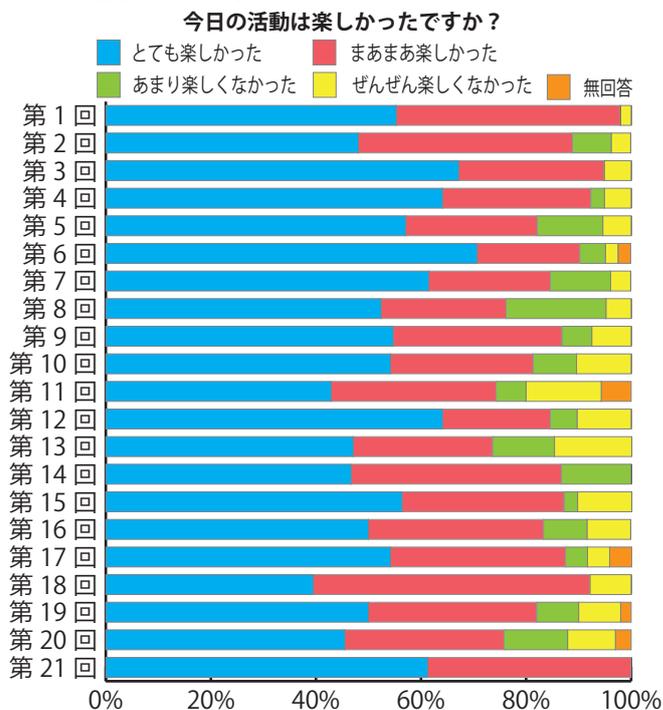
本年度も子どもたちには、毎回の活動の最後にアンケートを記入してもらった。このアンケートは活動を通して、「子どもたちにどのような変化があるものなのかを見ること」「子どもたちのコミュニティ形成について」「子どもたちとフェローとの関係を見ること」の3点について知るための調査である。このアンケートは7つの項目と自由感想欄の全8項目で構成されている。

活動に関するアンケート調査項目	
1	今日の活動は楽しかったですか？
2	今日の活動でとくになにが楽しかったですか？
3	今日の活動で東京から来た先生に一对一で教えてもらいましたか？
4	東京から来た先生にとくに何を教わりましたか？
5	今日は友だちや仲間と一緒に活動した場面はありましたか？
6	友だちや仲間と一緒に活動したときにどんなことをしましたか？
7	今日の活動の自分には満足できましたか？
8	今日の活動の感想を自由に書いてください

今年度は7月6日の練習から調査を開始し、2014年最後の練習となった12月23日までの計21回アンケートをとった。このアンケートの対象者は小学生以上の80名である。最も回収率が高かった第11回で97.2%。最も回収率が少なかった第14回は25.9%である。これは受付との連携ミスによりすべての子どもにアンケート用紙を配布できないという状況になったためである。昨年度とは違い、今年度は調査者が現地調査に行っていないときでも、アンケート調査を行うため、現地在住の指導者や保護者に協力してもらい、アンケートの配布・回収を行なった。アンケートの配布手順等については、毎回アンケート用紙を郵送する際に、マニュアルを添え、調査者が現地調査に行っている際にも、保護者にアンケートの配布手順等を説明し、円滑に行われるようフォローするようにした。

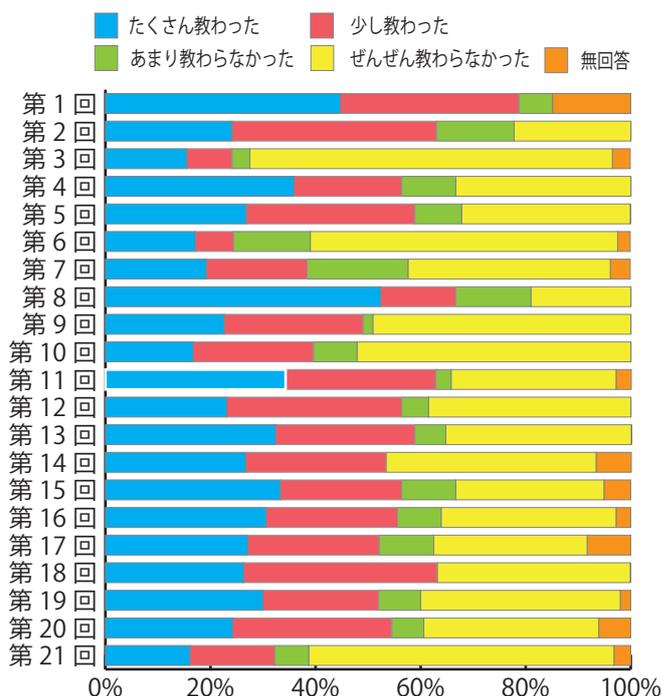
回数	回収日	参加人数	回収部数	回収率
1	7月6日	56名	47部	83.9%
2	7月13日	61名	54部	88.5%
3	7月20日	70名	58部	82.9%
4	8月3日	57名	39部	68.4%
5	8月4日	61名	56部	91.8%
6	8月5日	64名	41部	64.1%
7	8月17日	42名	26部	61.9%
8	8月30日	37名	21部	56.8%
9	9月7日	62名	53部	85.5%
10	9月14日	57名	48部	84.2%
11	9月21日	36名	35部	97.2%
12	9月28日	48名	39部	81.3%
13	10月5日	47名	34部	72.3%
14	10月19日	58名	15部	25.9%
15	10月26日	50名	39部	78.0%
16	11月2日	43名	36部	83.7%
17	11月9日	57名	48部	84.2%
18	11月23日	45名	38部	84.4%
19	11月30日	63名	50部	79.4%
20	12月7日	68名	33部	48.5%
21	12月23日	49名	31部	63.3%

昨年度に引き続き、活動の楽しさを問う設問では、ポジティブな回答が多い。「とても楽しかった」「まあまあ楽しかった」のデータを合わせ、全21回分のデータを平均すると85.8%となる。特に、12月23日の第21回目のアンケートでは「とても楽しかった」「まあまあ楽しかった」と回答した子どもが100.0%となっている。



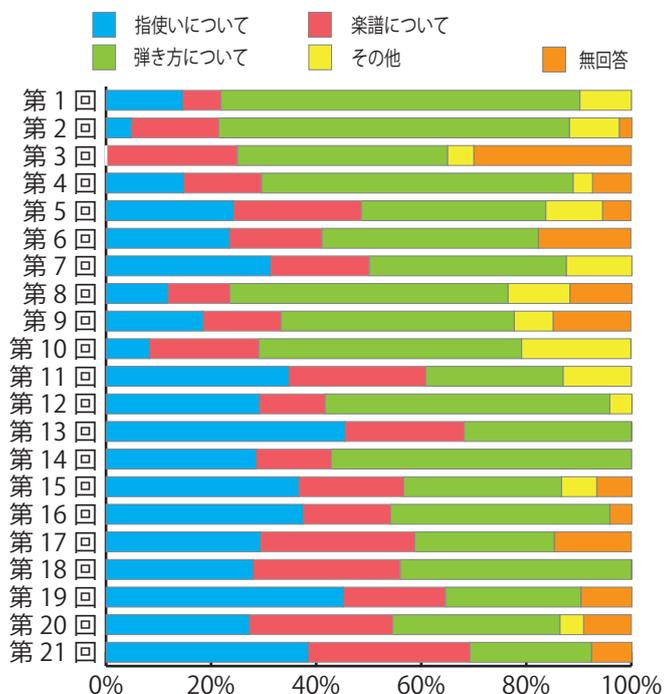
フェローから一对一で指導がされた子どもは「たくさん教わった」「少し教わった」を合わせると第1回が最も多く78.7%である。第3回が最も少なく24.1%となった。

今日の活動で東京から来た先生に一对一で教えてもらいましたか？



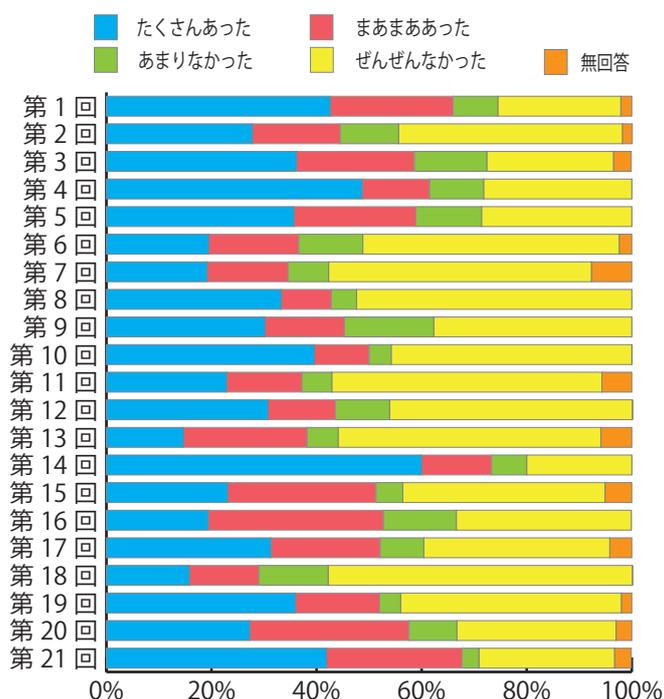
とりわけ、フェローに指導をしてもらった内容について一番多いのは「弾き方」となった。次いで「指使い」、「楽譜」、「その他」という結果になった。

東京から来た先生にとくに何を教わりましたか？



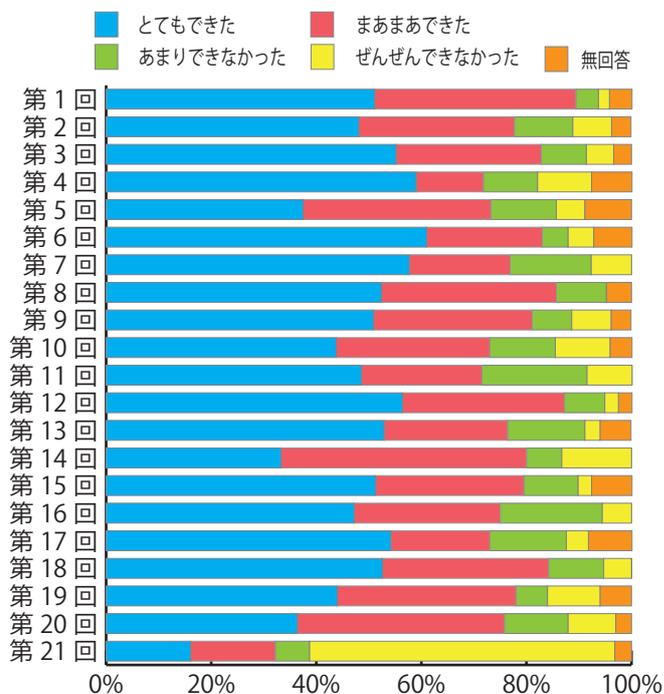
友だちや仲間と一緒に活動した場面は「たくさんあった」「まあまああった」を合わせると第14回の73.3%が最も多く、第18回の28.9%が最も少ない。

今日は友だちや仲間と一緒に活動した場面はありましたか？



活動における自分への満足度の調査では、「とてもできた」「まあまあできた」を合わせると、第1回がもっとも多く89.4%、第21回がもっとも少なく、32.3%となった。

今日の活動の自分には満足できましたか？



考察

子どもにとっての練習

活動の楽しさを聞く設問では、13 ページで示しているように、第 21 回の練習で 100.0%という結果になった。この日は、12 月 25 日の福島市での演奏会に向けて、午後だけ練習を開催した。この日は 25 日に向けた練習でグループ練習とリハーサルを兼ねた練習が行われ、「本番ががんばりたい」というコメントが自由感想欄に多く書かれていたことから、そこに向けての期待のあらわれだと考えられる。

昨年度と同様にアンケートの傾向として、本番前の練習では楽しいという回答が減少する。普段の練習では、休憩を挟みながら、のびのびとした雰囲気の中で練習が行われる。しかし、本番前の練習では、指導者も何度も何度も繰り返すできないところを反復練習したり、休憩時間が短くなったりすることがよくある。そのため、子どもたちにとっては楽しいという印象が減少すると考えられる。第 21 回の練習の際に、楽しいという回答が 100.0%となったことは今までの傾向からすると例外的ではあるが、子どもたちの発表会への向けた姿勢の変化があるのかもしれない。このように、練習内容によって子どもたちが楽しいと感じるかどうかが決まる。

一方で、ゲストが来てイベントをやる場合や、フェローの演奏を聴くなど普段とは異なることが練習のなかに入る場合は、楽しいという回答が増加する傾向がある。

これも、いつもの練習と違い、子どもたちにとって非日常的かつ、新たな経験となり、楽しさが増すと考えられる。

フェローとの関係

次に、フェローと子どもたちの関わりについて検討をする。大学生・社会人を中心としたフェローは子どもたちにとって、お兄さん・お姉さんのような存在であると同時に、楽器を教えてくれる「先生」でもある。今年度から練習の挨拶の際に、フェローは子どもたちに「東京から来た〇〇先生です」と紹介され、一言挨拶することになった。以前の子どもたちとの関わり方では、同じパート同士では、交流があるものの、子どもたちはフェローの名前や顔を覚えていないということがあった。そのため、「先生」と誰もが呼びやすい呼称がつけられたことは子どもたちにとって、フェローとの関わりハードルが下がったと考えられる。フェローは子どもたちの間を縫い、適宜子どもたちへ指導を行う他、パート練習などのグループにわかれたときに、グループをまとめることがある。そのため、普段の練習のなかでは一対一で指導・アドバイスをもらう機会が多くなる。その代わりに、第 3 回や第 6 回ではゲストが来ていることや、発表会が開催されているため、普段のようなフェローとの関わりがなく、一対一で指導を受けることが少なくなっている。

子どもたちはフェローから指導されるときに、「弾き方」を教えてもらうことが多いことがわかったが、「弾き方」といっても、単純に弓を動かす動作だけではなく、表現方法を踏ま

えた「弾き方」の指導である。これは、毎回現地調査の度に見られる指導である。子どもたちは曲調に合わせた演奏法や弓の使い方、動かし方を習い、それに倣って、それぞれが何度も繰り返し練習を重ねていた。

教え合いのシステム

コミュニケーションをとる場として、子どもたちが普段の練習のなかで、一緒に練習した場面を抽出する。昨年度と比較すると、子どもたちが練習のなかで、一緒に練習する場面が増えた。今までは個人で練習していたが、友だちとわからないところを確認し合ったり、グループ練習が増え、必然的に一緒に活動することが増えた。最近では経験者のなかでもモーツアルトチーム（一番手の経験者グループ）がバッハチーム（二番手の経験者グループ）を教えたりする子どもたち同士の教え合いの場面が多く見られた。本国ベネズエラのエル・システムに倣い、週末弦楽器教室でも、ゆくゆくは経験が長い子どもが経験の浅い子どもに教えるという仕組みを作っていくというねらいもあり、練習のなかで、より先輩であるメンバーが、後輩を教えるという練習が取り入れられている。この練習によって、子どもたちのなかには教え合うということが根付いていくと考えられる。

練習のなかで子どもたち同士の会話が増えたという点でも週末弦楽器教室というコミュニティが変化していると考えられる。昨年度は、練習中に子どもたちの会話はほとんどなく、わからないところはなんとなくやりすごすことが多く、自分から「わからない」と言葉を発するというよりも、指導者やフェローがわからない・できない子どもを見つけ、適宜指導する姿が見られた。しかし、今年度は自分たちでわからないところを話しあったり、できないところはできる先輩に聞きに行くという姿が頻繁に見られた。このように、子どもたちは活動を通して、教え合いの姿勢が自然と身につけている。

自分への満足度

最後に、練習における自分への満足度について見ていく。最後の練習である第 21 回を除き、ほかの練習では多少振り幅があるものの、子どもたちは概ね、その日の自分の演奏に満足している様子が見られる。14 ページの「子どもたちにとっての練習」で触れた「今日の活動は楽しかったですか」と同様に、子どもたちはイベントや発表会がある日の満足度が高くなる。目標のために日々練習をがんばるという姿勢が、当日の演奏で発揮され、子どもたちの満足度をあげる結果となっていると考えられる。一方で、子どもたちは演奏会前の練習になると満足度が他の回と比べ、下がる。というのも、14 ページの「子どもたちにとっての練習」でも検討したが、本番前の練習の際に、子どもたちは練習で追い込まれる状況になる。できな

いところを何度も何度も練習する。そのため、子どもたちはできないことをさらに認識することになり、特に「とてもできた」と回答する子どもが減少したと考えられる（第5回、第14回、第20回）。

第21回は12月25日の福島市で行われる演奏会に向けた最終練習であり、なおかつ全21回のうち最も満足度が最も低い結果となった。第21回では「とてもできた」「まあまあできた」と回答した子どもが32.3%しかいなかった。一方で第21回の「今日の活動は楽しかったですか」で楽しいと回答した子どもは100.0%であった。このような状況が生まれた要因としては、第21回は本番前最後の練習であったための、ゲネプロのように本番さながらの演奏をしたことやいつもより練習時間が短かった等非日常的な要素が加わったことで楽しさに繋がったと考えられる。しかし、本番さながらに通して演奏することにより、未熟な部分を子どもたち自身が認識することになり、自分への満足度が低下したと考えられる。このような側面が同時に発生したことで、満足度と楽しさに大きな差が生まれたと推察される。

まとめ

今年度も昨年度と同様、子どもや保護者にアンケートを経年的に実施している。そこでは、P.8、P.11～12で示したように、いくつかの特質が見受けられた。その中で、確認すべき項目として、相馬市という自分の生活のコミュニティに対して、「好きである」というポジティブな回答の多さに比べ、地域での活動の参加率が全国と比べ低くなっている現状、これは現状について様々な要因があることが予想されるが、ぜひ注目していきたいデータである。

私たちのアイデンティティの形成は、他者を通して自分を確認していくことから始まる。地域社会で育むアイデンティティとは、ともに生まれ育った人たちと、毎年同じ時期に、同じ活動をする、という地縁的な時間軸の共有によって、形成されていく。子ども達のアイデンティティの形成を考えたとき、特に、相馬市のように、東日本大震災以降、自分と居住する地域の関係を、何度も確認しなければならない境遇に遭遇している子どもたちにとっては、なおさらである。

その時、この2年間、調査をしているエル・システムジャパンの相馬市での活動は、子どもたちや保護者をはじめ、地域の人々にとって日常的な活動になり、演奏会などを通して自分たちの繋がりを確認してきた点で、大きな意味を持っている。私たちはエル・システムジャパンの継続してきたこと、特に受け入れる子ども達の幅を広げていこうとしていくその姿勢に、共生社会の最も重要なコンセプトである、社会的包摂（inclusion）と、子どものアイデンティティ形成の繋がりを感ぜざるを得ない。



おわりに

本プログラムの報告書をまとめるにあたり、この2年間で感じていることに触れていきたい。

週末弦楽器教室に通っている子ども達は、初めは弦楽器の技能を習得していくことが目的で参加している。そして、個人差があるとはいえ、時間によって上達していく。では、子ども達が得ていることは弦楽器の上達だけだと言えるのだろうか。その答えは否である。

では、子ども達は何を得ているのだろうか？この週末弦楽器教室など、エル・システマジャパンの活動をみていくと、そこには単に弦楽器などが上手くなっていく場に子ども達がいるということではなく、弦楽器でつながっている周囲の人たちとコミュニティを作っていくことを通して得ているものがあることがわかる。しかし、人が集まっているからコミュニティができるというものではない。

この週末弦楽器教室にはコミュニティができれば受け皿として設計されているのだ。それは排他をできるだけ避けて受け入れる可能性を追求していることと、受け入れたら、必ず居場所を用意しているということである。排他をしていないことは参加している子どもたちが就学前の幼児から高校生、一般までいるということである。居場所が用意されているということは、演奏会に必ずどこかで出演できるということである。当たり前かもしれないが、弦楽器を習っている子ども達は、その発表の場である演奏会に参加できることで、自分が弦楽器を習っている必然を獲得できるのである。

演奏会に参加できるということは、その曲作りに参加しており、自分が欠くことのできない成員の一人であることが自覚できるのである。この週末弦楽器教室というコミュニティで自分がどんな小節であれ、演奏に参加できていることは、このコミュニティの一員であることが認められているということであり、自分が成長していくことが確認できる場にいることだと考えられる。

子ども達は、人前で演奏するときの高揚感や終わったときにあびる拍手でもたらされる達成感など均等に分かち合っている。この高揚感や達成感をともに味わう仲間たちの存在が自分が感じているそれらの感情を保証してくれていることに気づいていく。

つまり、高揚感や達成感を演奏する仲間と味わっていく回数が増えるごとに、自分と周囲の関係が代替することができない関係になるのである。一緒にやった仲間だからという意識は子ども達にとって重要なものである。特に、エル・システマジャパンの指導方法は、演奏会では自分が演奏できる場所だけ参加するという自然で無理のない方法をとっているため、子ども達と一緒にいるという意識は高まっていく。

意識の高まりは、教え合う関係にも出てくる。子ども達は自分一人ではできないことも、他の人に教えてもらったり、励まされたりすることでできるようになっていく可能性を持っている。この一人で「できないこと」と「できること」の間には「人に手伝ってもらったり、何かモデルがあったりするとできる」という領域が存在する。それはヴィゴツキーというロシアの心理学者が、子どもの観察から見いだした「発達の最近接領域」という考え方である。

週末弦楽器教室はその現場であるとも言える。

これらのエル・システマジャパンのスタイルから「教えること」の意味について考えていきたい。

教育には演繹的な方法と帰納的な方法がある。演繹的な教育とは、正解がある場合の教育方法であり、教えて到達すべき目的がはっきりあり、それに向けてもっとも効率的な方法を見だし、その成果としての知識獲得が正確で達成できるように仕向けていくものである。そこでは、目的、結果、方法が因果関係で強く結びついていくことが重要なのである。

それに比べて帰納的な教育は、正解がない場合の教育方法である。そこには正解がない代わりにその場にいる成員で作ら出す納得解というものがある。納得解とは、その場にいる成員が納得した解であり、そこには納得解の生成プロセスに妥当性があることを共有していくことが重要である。

エル・システマジャパンの週末弦楽器教室では弦楽器の技能を学ぶための演繹的な教育と、週末に出会う成員間で互恵的なコミュニティ形成という帰納的な教育が共に生成されている。なぜなら、そこには「社会的包摂 (inclusion)」という排他を拒絶するコンセプトがあるからである。

2014 年度報告書

相馬子どもオーケストラ&コーラスプロジェクトにおける
週末弦楽器教室に関する報告書

調査・発行	一般社団法人エル・システムジャパン
調査委託先	青山学院大学社会情報学部苅宿研究室
主査	苅宿俊文
発行日	2015 年 3 月

2014 年度調査は平成 26 年度文化庁 地域発・文化芸術創造発信
イニシアチブ事業の一環として実施されました。

※無断転載・複製禁止

